

小学校音楽科教育における、 スピーキングコーラスを用いた「音楽づくり」の実践

- 岩見沢市立中央小学校第5学年での実践 -

七飯町立七飯中学校
音楽科 教諭 佐藤 圭佑

平成25年2月に、日本学校音楽教育実践学会第6回北海道支部例会において、実践報告を行いました。前任校、岩見沢市立中央小学校第5学年における「音楽づくり」の実践です。

日本学校音楽教育実践学会
第6回北海道支部例会 実践報告

平成25年2月23日
岩見沢市立中央小学校 佐藤 圭佑

1. 実践目的と学習計画

平成20年改訂学習指導要領から、音楽科においては【共通事項】の新設により、各領域で児童に知覚・感受させていくべき事項がより明確化された。教科担任制が基本ではない小学校で、音楽を専門としない教員でも、【共通事項】の登場により、音楽の授業を展開しやすくなったようにも思える。しかしながら、「音楽づくり」だけは未だに取扱いにくい、または取り扱わないケースが多く存在するようである。

本校においては、高学年（今年度は第5・6学年）音楽の授業を専科担任が受け持っているが、児童は高学年以前で「音楽づくり」を経験していなかった。今年度は、岩見沢市教育委員会、岩見沢市教育研究所、北海道教育大学岩見沢校が連携して行っている事業である遠隔学習を利用し、「音楽でえがこう～雨の表情を表現しよう～」に1学期取り組んだ。「音楽でえがこう」では、トーンチャイムとハンドベルを用いて「音楽づくり」を行った。そこで2学期は、声を用いたスピーキングコーラスで「音楽づくり」に取り組ませたいと考え、本実践を行った。

学習計画は3時間計画で行い、

第1時間目 様々な声による作品の鑑賞、「音楽づくり」カードの表現練習、習作1の創作

第2時間目 習作1の発表、習作2の創作

第3時間目 作品発表会とまとめ

という計画で授業を行った。なお第2時間目の授業に関しては、地域連携特設公開授業として授業を公開した。

2. 児童の実態

本校は各学年2クラスで編成されている。今回「音楽づくり」に取り組んだ

5年生は、「こんな風に演奏したい」、「もっとよく演奏したい」、「この音楽を聴いてみたい」など、音楽科の諸活動に極めて積極的に取り組む学年である。

特に、歌唱や合唱の活動に関しては積極的かつ意欲的に取り組み、今年度は学習発表会において、北海道教育大学岩見沢校出身で、現在東京藝術大学大学院で学ぶ、新進気鋭の作曲家の新作合唱曲に取り組んだ。

高学年になると思春期特性が少しずつ表出し始め、音楽科の活動における声を出すこと、歌うことに苦手意識を持つ児童も見られるようになってくる発達段階であるが、学年・学級として前述したような雰囲気であることから、今回スピーキングコーラスに取り組ませたいと考えた。

3. 学習経過

6月→「音楽でえがこう」～雨の音楽を表現しよう

(岩見沢市教育研究所と北海道教育大学岩見沢校による遠隔学習)

8～10月→学習発表会に向けて(合唱、器楽の発表に向けての練習)

11月→言葉のイメージから音楽をつくろう - スピーキングコーラス

(本実践)

6月に「音楽づくり」に取り組んでから本実践に至るまで、夏休みを挟み約5か月時間が空いてしまったが、その間に様々な音楽体験をしたことにより、本実践での児童の活動が非常に質の高いものになった。

学習経過の詳細については、別紙資料(学習指導案)と児童の創作した作品を用いて行いたい。

4. 実践結果と考察

この題材に取り組むにあたって、児童には自らの「思いや意図」を持って「音楽づくり」に取り組む、その過程においては、どうしたら自らの思う音楽になるか思考・判断・表現を繰り返しながら創作してほしいと考えていた。

児童は作品を作る際、自らの「思いや意図」を持って、音から音楽に構成していく過程を楽しみながら活動に取り組んでいた。また、これまで音楽科で学習してきたことや音楽経験を活かして、自らの思いや、イメージした場面を表現するには、どのようなカードを用いれば聴く人に伝わるか、思考・判断・表現を繰り返しながら作品作りにあたっていた。その姿勢は演奏する際にも見られた。音色、強弱、抑揚など、自らが表現したいものを聴く人に伝えるには、どのように演奏したらよいか、試行錯誤を繰り返しながら演奏を作り上げていた。

グループ活動であったことから、1人で取り組むには難しいと考えていた児童も取り組みやすかったように見受けられた。またカードを用いて音楽を作るという活動であったので、ある程度見通しを持って取り組むことができたようだ。加えて、児童の「こうしたらどうだろう」、「こんな表現カードを作ってみたらどうだろう」、という意欲もかき立て、「またやってみよう」という次への学習意欲も高める題材であったようで、児童は「音楽づくり」を身近なものに感じられるようになったようだった。

5. 今後の課題

平成20年改訂学習指導要領から、各領域を相互関連させて指導することが求められている。今回の学習で、児童は歌唱、器楽、鑑賞のそれぞれの授業で

知覚・感受して身に着けてきたものと、日頃の音楽経験をもとに「音楽づくり」に取り組んでいた。各領域が単独で完結するのではなく、領域間に関連性を持たせ、児童の音楽経験を深めていくことが重要であることを実感した。

また近年、義務教育9年間を意識した教育活動の展開が求められている。音楽科教育の「音楽づくり（創作）」分野にスポットを当てて考えたとき、中学校では3年間継続して「創作」に取り組んでいると思われるが、冒頭でも述べた通り、教科担任制ではない小学校では、取り組みにバラつきがあるケースが多いように思う。小学校においても第1学年から第6学年まで継続した指導を行い、中学校との接続を意識していかなければならない。そのためには、専門教育を受け、知識・技能を有する教員を中心に、学校全体としてカリキュラム構成、指導方法と体制の確立が必要である。

児童生徒の「生きる力」、「音楽する心」を育む重要な手立てである「音楽づくり」をより効果的に行っていくために、今後も研究と実践を行っていきたい。